

「ドイツの保育園」 森明子（国立民族学博物館教授）

(1) キンダーラーデン 2019 年 1 月 5 日刊行

ドイツの保育園事情は日本と異なり、子どもが保育施設に席をもつことが法的権利として保証されている。数のニーズは満たされているが、保育園による違いは大きい。両親はいくつもの保育園を熱心に見て回って希望の保育園を決める。子どもがお腹にいるときから入園希望者リストに登録することもめずらしくない。

「キンダーラーデン」とは小規模な保育園である。1970 年代、学生たちが自分の子どもの共同保育をはじめたことから発展した。ラーデンは店の意味で、空き店舗を利用して保育したことからこの名がある。それまでの幼稚園が大勢の子どもを監視して、従順と排せつ訓練を重視していたのに対し、少人数グループで子どもの自由な意思を尊重して保育する。過度の放任主義による失敗もあったが、両親が参加する保育のかたちは現在も健在で、正式には EKT（両親の発意による保育園）と呼ばれる。

たとえば「ハツカネズミの閃光」というキンダーラーデンがある（キンダーラーデンの名前は、どれもとてもユニークである）。定員 20 人で、3 人の専任保育士のほかに、料理担当者 1 人、助手 1 人を含む。行政の補助金を得ているが、運営主体は両親がつくる「ハツカネズミの閃光協会」である。



キンダーラーデン「ハツカネズミの閃光」の様子。窓の向こうには街路が見える＝ベルリンで 2010 年 9 月、筆者撮影

(2) 多文化教育 2019 年 1 月 12 日刊行

さまざまな文化が会うベルリンで、多文化教育は重要なテーマである。コムシュ（トルコ語で「隣人」を意味する）保育園は、ドイツ語文化とトルコ語文化を等しく学ぶ多文化教育を早くから掲げてきた。どの子どももドイツ語とトルコ語の双方を使いこなす。どのように教えているのか聞いてみた。

一つのグループは 16 人ないし 12 人で、ドイツ語家庭の子どもが 5 割強になるように編成する。保育士は 2 人で、ドイツ語を母語とする保育士とトルコ語を母語とする保育士が組になる。グループの日常活動は、ドイツ語とトルコ語のバイリンガルである。

保育園では、キリスト教の行事（謝肉祭、復活祭、聖マルティンの提灯行列、クリスマス）とイスラム教の行事（砂糖祭、犠牲祭、イラン暦正月）のすべてを、全員でともに祝う。友達の文化を友達とともに経験することを通して、自分の文化も友達の文化も大切に思うようになる。食事は野菜主体で豚肉は供さない。水泳や体操をさせないという親にはお引取り願う。

二つの文化を知り、思うことを二つのことばで表現できることは、子どもの世界を 2 倍にも 3 倍にも広く豊かにする。ドイツ人家庭からも、トルコ人家庭からも、入園希望者が絶えない。



コムシュ保育園の様子＝ベルリンで 2010 年 9 月、筆者撮影

(3) 学童保育 2019 年 1 月 19 日刊行

ドイツでは、初等学校の授業は午前中で終わる。親が日中働いている場合、子どもを見る人がどうしても必要になる。

ベルリンでは小規模な学童保育が数多く存在し、それぞれ特色ある活動を展開してきた。保育士はしばしば子どものよき理解者であり、相談相手になった。外国人労働者の子どもたちを助けて、重要な役割を果たしてきた学童保育も少なくない。また、幼児から学童までを連続的に見る保育園もあった。年齢差のある子どもたちのあいだに、親しい人間関係が育まれた。

しかし 21 世紀初頭、ベルリン州は小規模学童保育を閉鎖し、すべての学童保育を初等学校におくことを決定した。以前からあった初等学校の学童保育を制度化し、充実させる政策であるが、そこではどのような保育をめざしているのだろう。

初等学校では、保育の空間・人数・設備は、より広く、より多く、より充実する。スポーツ・音楽・アートを含むさまざまな分野の専門講師によるプログラムが提供される。その一方で、一人の保育士が担当する子どもの数は増え、きめ細かな心遣いや親しさという面では後退せざるをえない。

21 世紀の学童保育は、ケアの場から教育の場へシフトしているようだ。



「子どもバー」という名のカフェをもつ保育園。かつて学童保育も行っていた＝ベルリンで 2011 年 9 月、筆者撮影

(4) 家賃高騰の影 2019 年 1 月 26 日刊行

ベルリンの壁崩壊後、再統一を遂げた首都は、いくつもの記念碑的建築物を生み出したが、同時に物価は上昇をつづけ、人々の暮らしをじわじわと圧迫している。とくに家賃の上昇はすさまじく、その波は保育園にも及ぶ。

「小さくても強い」という名前のキンダーラーデン（保育園）は、1970 年代に保育活動をはじめたパイオニアであるが、013 年夏、家賃を払えなくて立ち退きになった。

冷戦時代、ベルリンの壁に接するこのあたりは西側世界のどん詰まりだった。がれきの山も残るうす暗いストリーートの空き店舗を利用して、「小さくても強い」はつくられた。幼児と高齢者が参加するプログラムを推進して、街区の人々が集う場としての役割も担っていた。

壁が崩壊し、21 世紀にはいると、ストリートは人気のスポットとなり、「小さくても強い」の家賃も値上がりした。保護者と保育士が運営する保育園の経営は厳しい。救済を行政に訴えたが通らなかった。立ち退いた後の空き店舗のショーウィンドーに、コピー用紙に走り書きした文が残されていた。そこにはあいさつとともに「35 年間ここで活動し、家賃のために出ていく、これが正しいのだろうか」ということばもあった。

それから 5 年たったいま、立ち退きは増えて事態は深刻化している。



キンダーラーデン「小さくても強い」。立退き後も抗議文は残る＝ベルリンで 2013 年 10 月、筆者撮影